

# 原爆文学研究会報

第三五号

原爆文学研究会 二〇一一年八月

忘れられた戦争 第一次世界大戦（一九一四―一九一八）が終わって六六年が経った頃の日本では、すでに第一次世界大戦は「忘れられた戦争」となっていた（山上正太郎著『第一次世界大戦―忘れられた戦争』社会思想社の出版が一九八五年）。しかし、第一次世界大戦は決して「忘れられた」過去の出来事ではなかった。

この大戦終結から九三年目となる今年になって、二月二八日にアメリカ軍の第一次世界大戦従軍者のなかの最後の生存者であったフランク・バツクルズ氏が一一〇歳で死去し、五月五日に第一次世界大戦の戦闘に参加した経験のある最後の生存者であったイギリス海軍の退役軍人クロード・チヨールズ氏が一一〇歳で死去したことが報じられている。Wikipediaの“List of veterans of World War I who died in 2009-11”によると、この三年間で上記の二名を含めて八名の第一次世界大戦従軍者が死去している。そのなかの地上戦経験者の最後の生存者であった元イギリス軍兵士ハリ・パッチ氏（二〇〇九年死去）は、一〇〇歳を過ぎてから戦争の恐怖を語り始め、最後の数年間はドイツ兵の墓を訪れたり、あらゆる戦争に反対するなどの活動をしていたという。その葬儀にはフランス、ベルギーやドイツなど戦火を交えた国々からも外交官らが出席し、彼は平和と和解のメッセージを広めたと讃えられた。第一次世界大戦が終わって九〇年が経っても、戦争の記憶とともに生きてきた元兵士はその戦場での体験を語り、互いに戦った国々もその体験を受け止めていたのである。

これら第一次世界大戦を戦った最後の兵士たちの死とその死をめぐる報道は、第一次世界大戦がヨーロッパに深い傷を与えた「忘れられない」戦争であったことを伝えている。それとともに、この兵士たちの死とその報道から、第二次世界大戦の最後の兵士や最後の被爆者らがいなくな

る日のことを、具体的な年月を数えながら考えずにはいられない。そのとき、世界のどこかで、その死者を前に、敵同士であった国々から集まった人たちが、その死を悼み、和解を讃えることができるのだろうか。第二次世界大戦終結から六六年が経ちながら克服すべき課題はまだ多いが、時間もまだ残されている。（新木武志）

## 第三五回 原爆文学研究会報告

二〇一一年七月三〇日（土）、活水女子大学で開催した第三五回研究会には約二〇名が参加。

澤田氏の発表に対しては「難しいことでも、あえて被爆者と強制収容所体験者を比較して、なぜ三世代においても差異が生じるのかを考えなければならぬのではないか」「トラウマというような分析概念はより慎重に用いるべきではないか」等の質疑がありました。

富永氏の発表に対しては「新しい語りの取り組みに可能性を見たいが、伝える内容が体験でも事実でもないというときに、では一体何を語るのかが問題になるのではないか」「語りの形式と年齢や被爆体験の有無とはどのような関係があるのか」等の質疑がありました。



## 原爆被爆者三世代

— 証言とそこから見えてきたもの

澤田 愛子

本発表は拙書『原爆被爆者三世代の証言——長崎・広島 of 悲劇を乗り越えて』（創元社、二〇一一年）に基づくものである。

アメリカやイスラエルでは、ホロコースト生還者の子ども達が特異な心理社会的反応を見せたことにより、ホロコーストの子ども達の研究がさかに行われるようになり、現在では対象が三世代まで拡がっている。親の世代の大災厄の体験が子どもと孫にどのような影響を与えているのか、三世代研究はホロコーストの生還者研究では最近、主流となっている。

ホロコーストが後の世代に何がしかの心理社会的影響を与えているのなら、同様に人間に起因する (man-made) 大災厄である原爆被爆も、世代を通して何がしかの心理社会的影響を与えているのではないだろうか。このような問題意識のもとに始めたのが原爆被爆三世代の研究であった。国内外とも、この種の研究はこれまでなかった。

筆者はこれまでに全国で一〇家族の三世代三〇人にインタビューを実施し、ナラティブ・リサーチの手法に基づいて研究を進めてきた。拙書ではそのうち、三家族九名のインタビューを紹介し解説を付した。本発表では、その中からさらに一家族を抽出して考察を行った。

山本（仮名）家の第一世代は韓国から自分だけ帰国し広島で被爆した。その不運を嘆きながらも幸運が重なって生き延びることができた。戦後まもなく原子野で瓦礫撤去の作業をしていたとき、友人がたまたま読んだ聖書のことばに深く感動し、キリスト信者になった。しばらくして教職に就き、その後教員としての人生を歩むが、自分がかつて住んでいた

こともあって次第に韓国人被爆者に思いを寄せていくようになる。ことに、日本社会の韓国人被爆者への冷淡な態度に心を痛め、加害者として罪意識を募らせるようになっていく。彼にとっては自分が受けた健康被害よりも加害者としての日本という問題意識の方がより強くなっていくのであった。これがその後、彼をして韓国人被爆者支援活動へと向かわせることになった。

山本家の第二世代は父親の倫理観の影響を強く受けて育った。体調不良や幾つかの挫折体験を経て、現在は幼稚園の教諭をしながら新しい価値の創造に熱意を費やす日々を送っている。第三世代も被爆者である祖父と父親の影響下にあつて正義感が強く、思春期前期の少女の伸びやかさを保ちつつも、同世代の少女達とは少し異なった考え方を持っていた。被爆の問題に無関心なクラスメイト達に厳しい批判の目を向けている。

山本家の三世代は第一、第二世代とも大病を体験しながらも、被爆者とその家族が抱きがちな原爆症への怯えに捕らわれることはなかった。少なくともナラティブでは出てこなかった。むしろ、原子野の瓦礫の野から第一世代が築き上げた新しい生き方の息吹に包まれているようだった。

ホロコーストの子ども達が親の体験や戦後の歩みから深刻な影響を受けているのとは異なつて、被爆者の子ども達は健康への不安以外にはそれほど影響を受けているようには見えなかった。むしろ、大災厄を生き残つて戦後も強く生きてきた親や祖父母と強い絆で結ばれるという肯定的な影響も目立った。山本家に限つて言えば、その健康不安も表面化せず、そこにあるのは親が過去の災厄と破壊体験を通して生み出した新しい価値観のもとに家族が集結し連帯する姿勢であった。しかし、被爆三世代研究は始まったばかりである。今後、この種の研究の広がりを期待したい。

## 「記憶」をつなぐ語り

——長崎・被爆体験の継承活動が示すもの——

富永 佐登美

戦争の記憶を継承する試みについての報道が年々増えている。継承が喫緊の課題と認識されていることの証左であろう。長崎における被爆体験の継承も同様の状況にあり、昨今では体験していない者（非体験者）が被爆を語る場面も増えている。原爆資料館では、一九八三年より語り部の被爆体験講話が、また、二〇〇四年からは、原爆資料館や周辺遺構を解説してまわる市民ボランティアガイド・平和案内人制度が開始されている。そこで、本研究では、語り部と平和案内人、および、平和案内人の中から別の活動を始めた自主活動グループPBNを取りあげ、それらの語りの方法の違いと意味を（物語状況の動態化）の概念を用いて検討する。

語り部の被爆体験講話は、一個人の被爆体験が、「私」の視点から一人称的に語られるものであり、聴き手からもそれが求められている。しかし、これは元来体験者にも可能な方法であり、記憶媒体への記録を別とすれば、声を媒体として対面でおこなわれる語りとしては、非体験者が「私の経験」としては実践できないものである。すなわち、被爆者の消滅により成立しなくなる。

一方、平和案内人の語りは、業務が原爆資料館や周辺遺構の案内（碑めぐり）であるため、目前の事物を対象とした（実相）に関する解説・ガイドが主となる。そのため、語りは、視点を出来事の外部に置き、三人称的におこなわれることとなる。また、個々の事物に関するエピソードの羅列となりがちで、語りに一貫したプロットを構築し、被爆の全体

像を提示することがなかなか難しい。ただし、対象とする事物との間に平和案内人自身が個人的な記憶を持っていたり、解説中の言い間違いなどによって聴き手との間の緊張関係が崩れた場合に、平和案内人自身による、一人称的な経験の語りが披瀝される場合がある。この語りの揺れは聴き手の関心を高める作用をもたらす。

PBNは、依頼に応じて教育機関や成人のグループなどへ出前講座をおこなっている私的な自主活動グループである。出前講座では、被爆の（実相）に関する三人称的視点の解説をした後、詩の朗読や、紙芝居、朗読劇、あるいはメンバー自身の個人的な語りをおこなう。聴き手に紙芝居や朗読の実践をさせる場合もある。つまり、この出前講座では、（実相）が三人称的に語られる場面と、メンバーや聴き手が一人称的に被爆を語る場面が混在しているのである。語りの内容のみならず、「方法」やその「人称」「視点」などが多様化しており、聴き手の状況に合わせる形で刻々変化する。つまり、物語状況が動態化し、PBNと聴き手との間で被爆に関する新しい語りが創出される状況となっている。

今後はPBNの実践方法をより詳細に検討し論を進めたい。

発表に際して、沢山の方々よりご意見や参考となる文献のご紹介などをいただきました。ありがとうございました。

## 彙報

### 第三五回 原爆文学研究会

#### 【一日目】

○日時 二〇一一年七月三〇日(土) 一四時より

○会場 活水女子大学4号館二階会議室

#### ○研究発表

原爆被爆者三世代——証言とそこから見えてきたもの

澤田 愛子

「記憶」をつなぐ語り

——長崎・被爆体験の継承活動が示すもの——

富永 佐登美

#### 【二日目】

○日時 二〇一一年七月三一日(日) 九時より

軍艦島ツアー

### 機関誌「原爆文学研究」第一〇号原稿募集

「原爆文学研究」第一〇号を二〇一一年一二月に発行いたします。一〇号という節目を迎える今号には、できるだけ多くの会員のみなさまからご投稿いただきたいと考えております。本機関誌はこれまでに「原爆文学」に関する「批評」「エッセイ」「書評」「創作」を掲載してきましたが、今号では「原爆文学研究会一〇年——これまでとこれから」(仮題)と題して会員の皆さま(可能であれば全員)によるショート・エッセイ(分量は雑誌の書式で一頁未満でも可)も掲載したいと企画しております。もちろん本会の主眼となる「批評」「エッセイ」も例年以上に積極的にご投稿いただきたいと考えております(過去の研究会で発表なさった方で、まだ文章化されていない方も、ぜひこの機会にご投稿を「検討ください」)。第一〇号は単に活動一〇周年を記念するだけでなく、研究会の今後のあり方を考え

る上でも重要な号になると思います。皆さま奮ってご投稿ください。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一一年一〇月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添

付しての投稿の場合は同年一〇月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室

### 編集後記

今回も研究会の翌日に見学を行いました。出かけたのは軍艦島の名で知られる端島<sup>はしま</sup>。一昨年、日本でも翻訳が刊行された韓水山『軍艦島』などに思いを馳せながら歩きました。一九七四年に廃坑になってから約三十五年を経過しているとはいえ、もつと人の気配が生き生きと感ぜられる場所なのかと期待していましたが、廃墟を通り越してもはや「遺跡」を思わせる光景。すべてを変えてゆく時間の恐るべき力をまざまざと見せつけられました。

次回研究会は京都での開催です。(中野和典)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>